

教権か神権か

今日のテーマは、「教権か神権か」であります。教権というのは、教会の権威の事です。神権というのは神の権威の事です。聖書と歴史は、しばしば、教会において、人間の権威と神の権威の対立がありました。今日もあるし、これからもあります。

大争闘下 344 「真理と誤謬の最後の大争闘は、長い間続いてきた神の律法に関する論争の最後の戦いにほかならない。われわれは今や、この戦い、すなわち、人のおきてと主の戒めとの間の、また、聖書の宗教と作り話や言い伝えの宗教との間の、戦いに入っているのである」

今日は、ヨハネ 9 章からこの真理を学んでみよう:ヨハネ 9 章を開いてください。

1. 1～13 盲人のいやし
 - ① 安息日の出来事
 - ② 人々の反応 ついに人々は、パリサイ人、指導者に盲人を連れて行く。
2. 13～18 パリサイ人による尋問
 - ① 安息日の違反であると断定
 - ② 紛争、分列が生じる
 - ③ 再度尋問：誰が？その人をどう思うか？ 預言者だと思えます。欽定訳、新改訳「預言者です」
3. 18～23 両親の尋問
 - ① ユダヤ人を恐れてキリストを告白しない。
4. 24～34 第三回目の盲人の尋問
 - ① 「そのかたがどこから来たかご存じないと、不思議千万です」
 - ② 勇気と確信
 - ③ 除名
5. 35～38 神の子(欽定訳)、キリストに出会う。

ポイント:

1. 安息日問題： 神の戒め対人間の戒め
 - ・イエスは答えて言われた、「なぜ、あなたがたも自分たちの言伝えによって、神のいましめを破っているのか」マタイ 5:3
イエスは教えられた「人間のいましめを教として教え、無意味にわたしを拝んでいる」。マタイ 15:9
 - ・ユダヤ人は、安息日に癒しをしてはいけないとか、どれくらい以上はあるいていけないとか、どれくらい荷物を担いではならないとか、たくさんの人間の細かい規則を加えていた。安息日に出かけるときに、ハンカチを持って出かけることは労働だから許されない、けれども、前の日から、ハンカチを服に結びつけていればハンカチを持って出かけることは許されるなどと、どうでもいい規則を事細かく定めて、それを守らない人々を裁いていたのです。イエスを安息日違反と決めつけたのは、彼らの規則、教会指針であった。
 - ・神の教えは、安息日に良いことをするのは正しいことであると教えられた。ヨハネ 12:12.
 - ・ここに人間の戒めと神の戒めの対決が見られる。
 - ・ここに聖書と証の書という霊感の書があります。これは教会指針です。教会会議で決められた規則集です。どちらに権威がありますか。誰でもいつかどちらに従うかが試される時が来ます。

イザヤ 8:20 「ただ律法と証に求めよ、もし彼らがこの言葉に従って語らなければ、彼らのうちに光が

ない」

大争闘下 360 「しかし神はこの地上に、聖書、そしてただ聖書だけをすべての教理の基準、すべての改革の基礎として保持する1つの民を、お持ちになるであろう。学識者の意見、科学の推論、教会会議の定めた信条や決議(これらは、教会の数が多くてその主張も違うように、おびたしい数にのぼって内容も千差万別である)、大衆の声、—これらのうちの1つであれ全部であれ、それをもって信仰上の事柄に関する賛否の根拠と見なしてはならない。どんな教理や戒めでも、それを受け入れる前に、「主はこう言われる」という明日な事実をその裏づけとして要求すべきである」

3 希望 275 「弟子たちにお与えになった任務の中に、キリストは、彼らの働きのあらましを述べられたばかりでなく、彼らのメッセージもお与えになった。「あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ」とキリストは言われた(マタイ 28:20)。弟子たちはキリストがお教えになったことを教えるのであった。キリストがご自身の口を通してばかりでなく、旧約のすべての預言者たちと教師たちを通して語られたことがここに含まれている。人間の教えは除外されている。言い伝えや、人間の理論や結論、あるいは教会の律法がはいる余地はない。教会の權威によって定められたおきては、この任務の中に含まれていない。キリストのしもべたちは、そうしたものを教えるのではなかった。キリストご自身のことばと行為についての記録とともに、「律法と預言者」が世に与えるように弟子たちに委託された宝である。キリストのみ名は、彼らの合いことばであり、彼らを世人と区別する記章であり、彼らの一致のきずなであり、彼らの行動の權威であり、彼らの成功のみなもとである。キリストのみ国では、キリストのみ名がきざまれていないものはどんなものでも認められないのである」

(教役者への証 106-107 英文)「われわれの民には人に頼ったり肉なる者を自分の腕とする大いなる危険がある。自分自身のために聖書を調べ確証を考える習慣のない人々は、指導者に信頼している。そして彼らがなす決議を受け入れる。このようにして、もし、これらの指導的兄弟が、その民に神が送られる使命そのものを受け入れなければ、これらの人々もそれを拒むであろう。誰も自分は神の民に対する光を全て持っているとは主張すべきではない。主はこれをおゆるしにならない。『見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた。』と彼は言っておられる。たとえ、われわれの指導者すべてが光と真理を拒んだとしても、そのとびらは依然として開かれたままである。主はこの時代のため、その民に使命を与える人々を起こされる」

2. 紛争、分列が起こる。一致は真理によって一致がなされる。しかし、真理の反対は分列を起こすことがある。教会が、牧師が弱いのはそのためであるとも言われている。
3. イエスは、当時の宗教家たちによって、彼らの教会指針によって「罪ある人」「罪人」と断罪された。「その人は神からきた人ではない。安息日を守っていないのだから」。安息日を与えた主は正しく安息日をまもっていたのでまちがっていたのは、宗教指導者たちであった。
4. 17 節 「おまえの目をあけてくれたその人を、どう思うか」。「預言者だと思えます」「預言者です」(欽定訳、新改訳)と彼は言った。すなわち、その人の權威、資格のことを問うている。
5. 私たちに当てはめてみましょう。6月にバプテスマを受けた方々が8人いました。バプテスマを授けたハル・メイヤー先生は、どんな資格、どんな權威を持ってるのかということが今問題になっている。メイヤー先生は、れっきとしたセブンスデー・アドベンチストであり、すばらしい伝道者です。三天使の使命の福音、警告を発している。住んでいるローカル・カンファランス、通っている教会と良好な関係を持ち、その教会の長老である。まれに見る、SDAの原点に立つ伝道者である。
バプテスマのヨハネの權威はどこから權威が与えられたであろうか。イエスも「何の權威によって」と攻撃された(マタイ 21:23~)。

6. パウロとバルナバはアンテオケ教会で挨拶が拒否されても、伝道、バプテスマをさせていただく。幸いに純潔なアンテオケ教会は彼らに挨拶をした。「天から任命を受けていたことを公認するものであった。パウロとバルナバは、既に神ご自身から任命を受けていたので、手を置く儀式は、新しい恩恵や実際の資格を付け加えるものではなかった」患難上 173-4.

7. 22 節 「両親はユダヤ人たちを恐れていたので、こう答えたのである」

☆ 両親は、なぜユダヤ人たちを恐れていたのでしょうか。

☆ それは、もしイエスをキリストと告白する者があれば、会堂から追い出すことに、ユダヤ人たちが既に決めていたからである。会堂から追い出されることを恐れていたのです。つまり、教会から除名されることを恐れていたのです。我々はどうでしょうか。当時、イエスがキリストであることすなわち、神から使わされた方ということが「現代の真理」であった。

☆ 我々の「現代の真理」はなんなのでしょうか？

- ① 「三天使の使命」、天の至聖所における最後のあがない、再臨に備える特別な使命。
- ② 永遠の運命を決定する事件一日曜休業令に備えること
- ③ 獣とその像とその刻印に対する警告

☆ 永遠の福音の第一天使の使命は「神を恐れ、神に栄光を帰せよ」と SDA 信者に語られている！

8. 個人的経験の必要

☆ 大争闘下 359 「神の戒めのすべてに従おうと努力する者は、反対と嘲笑に会うであろう。彼らは神のうちにある時にのみ立つことができる。彼らは目の前にある試練に耐えるためには、み言葉の中に示されている神のみこころを理解しなければならない。彼らは、神のご品性、統治、御目的について正しい理解を持ち、それに従って行動する時にのみ、神をあがめることができる。聖書の真理によって心を堅固にした人たち以外には、だれも最後の争闘に耐え抜くことはできない。わたしは人に従うより神に従うべきかという鋭い質問が、一人一人に臨むであろう。その決定の時は今日の前に迫っている。われわれの足は、変わる事のない神のみ言葉という岩の上に、しっかり立っているだろうか。われわれは、神の戒めとイエスを信じる信仰をとりでとして、堅く立つ用意ができているだろうか」

大争闘下げ 396 この試練の時に、人間は、みな、自分で神の前に立たなければならない。「主なる神は言われる、わたしは生きている、たといノア、ダニエル、ヨブがそこにも、彼らはそのむすこ娘を救うことができない。ただその義によって自分の命を救いうるのみである」(エゼキエル 14:20)。

☆ 個人の信仰と勇気と確信の必要。

9. 詩篇 73:25 「わたしはあなたのほかに、だれを天にもち得よう。地にはあなたのほかに慕うものはない。」